



ワークショップの映像記録 (『文字の動き Chromatic Ambience』ダイジェスト版、3分):  
<https://youtu.be/Wa26q2eIiRs>



### Graphic Movements (Lean on Me) 文字の動き (私を頼って)

2019-2020年

インスタレーション(映像、蓄光PVCフィルム、人工芝) + ワークショップ

映像: 15分、投影面: 273 x 182 cm、人工芝: 91x178cm(一帖)

TOKAS本郷(東京)でのプロジェクト『追熟と訛り: 未熟の回復と鮭の遡上』の一部として

二人の人間が背中合わせで互いを支え、座り、立つという行為を通して人間性を実践するワークショップ。異なる社会で行なったその記録を用い、次のワークショップの楽譜(スコア)、舞台背景となるインスタレーション。『文字の動き』はこの二つの要素で構成される。

南アフリカで体験した人種間の不和、外国人差別の暴動に対する反応として、他者があって自分が存在すると考えるアフリカの哲学「ウブントゥ」と、漢字の「人」の体現を試みたもの。

### 舞台としてのコロナ禍

TOKAS本郷での展示のため、コロナウイルス蔓延で動くことや人に触れることなど、日常の行動の意味が変わってしまった、その新しい文脈でこのプロジェクトをさらに展開した。

ワークショップの舞台背景ともなるインスタレーションでは、南アフリカで行なった三つのワークショップの映像記録を投射した。コロナ禍の文脈と響き合い、TOKAS本郷と自治体から課せられたコロナ禍のルールに適應するよう、構成を仕立て直した。

### 余熱と残光、社会的距離と個人空間

投射面には三本のPVCフィルムを吊って空間を仕切り、その分断された空間に橋を渡すように帯状の人工芝を下に敷いた。PVCフィルムは医療・衛生用品メーカーのもので蓄光性があり、受けた光を留め、投射の暗い部分や映像の合間の間に蛍光緑の光を放つ。

人工芝の長辺の長さは、日本でのコロナ禍のルールで保つべき「社会的距離」。その大きさは畳一帖、日本文化における「個人空間」の二人分に相当する。

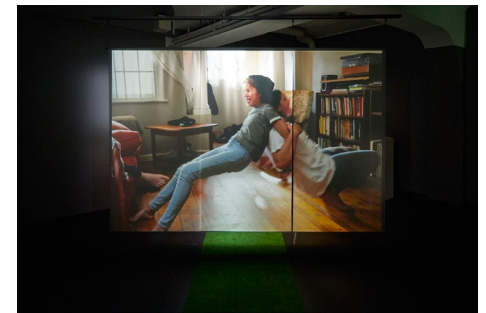
### 虹色の「離れた」ワークショップ

ワークショップは参加作家、TOKAS本郷のスタッフ、設営業者、TOKAS関連機関のスタッフなど、展示に関わる人々を参加者として展示終了後、撤収直前に非公開で実施。コロナの規制で私は日本に入国できず、スウェーデンの離島からオンラインでワークショップを指揮した。

投射面のフィルムは背中合わせに立つ二人を隔てる膜となり、人工芝は動きを行なうために載るステージとなった。前回の南アフリカでのインスタレーションでは、人種や国籍、性別に関わらずすべての参加者をプロジェクションの中の灰色の影に還元したのに対し、今回は温度を感知し色彩に変換するサーモカメラで記録し、ワークショップの様子を虹色に転化した。

### 空気を読み、独りで立つ日本の社会

参加者はマスクを着用、発話を控えるよう指示され、顔の表情だけでなく、ひととなりさえも隠された。沈黙のなか、参加者は背中を通して相手の筋肉の動きを感じながら、普段日本の社会で求められているように、空気を読んで摺り合わせ、コミュニケーションをとることに集中した。今回は南アフリカよりも成功率が高かったため、参加者の動きから着想をえて、誰かに支えられることなく、独りで座って立つことができるか、という新たな試みも行なった。



(左頁) 観客のいるインスタレーション風景(右頁、上から) プロジェクションのインスタレーション風景; 映像の合間の間に、PVCフィルムが蛍光緑の残光を放つ様子; PVCフィルムを挟んでのワークショップの様子; サーモカメラで撮影したワークショップの様子

